

関連学会印象記

米国心臓病学会 2008

阿 部 充*

私は平成20年11月8日から12日にかけて米国心臓病学会2008に参加しました。私は大学卒業後14年目であり、循環器内科医として国立循環器病センターのCCUに勤務しています。主な業務は急性心筋梗塞や不安定狭心症の患者さんの急性期管理とステント留置等の冠動脈インターベンションです。この報告は一般的な循環器内科医の客観的な報告というよりは、むしろ私の極めて主観的な学会印象記と考えて頂ければ幸いです。

今回の会場はニューオリンズであり、同地への来訪は私にとっても2007年の第56回米国心臓病学会議(ACC07/SCAI-ACC i2)以来2回目でした。経由地のシカゴは曇り空でみぞれ交じりの生憎の天候でしたが、ニューオリンズは抜けるような青空で椰子の木が茂り、行きかう人々の中には半袖姿

の人もおりアメリカという国の国土の広大さを改めて痛感しました。空港では世界中からニューオリンズに到着した参加者を出迎えるためにバンドの演奏があり、米国心臓病学会2008への期待はいやが上にも盛り上がりました。

米国心臓病学会は毎年多くの参加者を集める巨大会場ですが、今年の参加者は約24,000人でした。学会場は広大で、端から端まで歩いて優に10分はかかります。全米でもこれだけの学会を開催出来る会場はそう多くはなく、数年おきにここニューオリンズで開催されています(写真1)。

米国心臓病学会の1つの目玉は、Late-Breaking Clinical Trialの発表です。発表者以外は結果を徹底的に伏せられている最新の大規模臨床試験の結果が学会期間4日間毎日、厳選された4演題ずつ計



写真1

*国立循環器病センター心臓血管内科・CCU



写真2

16 演題発表されました(写真2)。そのどれもが非常に興味深い発表でしたが、私は個人的には以下の5つの演題に興味を持ちました。それらは、①正常コレステロール値($LDL \leq 130\text{mg/dL}$)でhs-CRPの上昇($\geq 2.0\text{mg/L}$)以外に冠動脈疾患のリスクの無い患者17,802名にスタチンを投与した群とプラセボ投与群の心血管イベントの発生頻度を比較したJUPITER Trial, ②2型糖尿病を有する日本人2,539名に対して低用量アスピリンを投与した群と投与しない群の動脈硬化性イベントの発生頻度の比較を行ったJPAD Study, ③3,031名の非ST上昇型急性冠症候群患者に対して早期の冠動脈インターベンションを行った群と行わなかった群の血管イベントの発生を比較したTIMACS Study, ④左室収縮能の保持されている($EF \geq 45\%$)、NYHAI度以上の心不全患者4,128名にARBであるIrbesartanかプラセボを投与して血管イベントの発生を比較したI-PRESERVE, および⑤5,051名の薬剤溶出性ステントまたはベアメタルステントを留置したDM患者のレジストリで予後と比較検討したMass-DAC Registryです。結果の詳細は省きますがどれも非常に良くデザインされ症例のエントリーもフォローもきちんとされており、解析方法も適切で結論は十分信頼出来るものでした。

私はこの学会で、「Repeated Target Lesion Revascularization in Patients Treated With Sirolimus-Eluting

Stent or Balloon Angioplasty for Post-Sirolimus-Eluting Stent Restenosis: Insights From j-CYPHER Registry」の口演発表を行い、「Prognostic Implications of Contrast-Induced Nephropathy After Percutaneous Coronary Intervention in Patients With and Without Chronic Kidney Disease: Insights From CREDO-Kyoto Registry」のポスター発表を行いました。前者は薬剤溶出性ステントであるサイファーステントの再狭窄患者に対して再度サイファーステントを留置するのとバルーンによる拡張のみで終了するのとどちらが有効かの比較検討です。無作為化比較試験ではありませんが全国から登録された15,000病変を超えるレジストリのサブ解析であり、結論はある一定の方向性を示していると考えられました。後者は冠動脈インターベンション施行患者に対する造影剤起因性腎症の影響を慢性腎臓病の有無で解析した報告であり、こちらも4,000例を超える患者の平均3年半以上の追跡データを基に解析しており、結論にはある一定の真実が含まれていると考えられました。これらの点に関して冠動脈インターベンションを実施している専門医と意見交換を行い、日米の現状と今後の展開を検討出来た事は非常に有意義でした。

これらの研究結果の発表および会場での多くのその他の口演発表、ポスター発表から、次の研究テーマへのヒントを得る事が出来ました。しかし

今回の米国心臓病学会では特に私のような冠動脈インターベンショニストの参加が少ないように感じられました。冠動脈インターベンションに関するセッションの参加者は少なく、企業展示でも大きなブースを使用しているのは製薬会社のみでステント等の医療器具メーカーの展示はごく簡素なものでした。これは1つは例年8月ないし9月に開催されるヨーロッパ心臓病学会の重要性が年々増しておりヨーロッパから米国心臓病学会への参加者が減少している事、もう1つはアメリカにおけるカテーテルインターベンションの最大の学会であるTCTが例年10月に開催されており冠動脈インターベンショニストは主にそちらに参加しているため開催期間が近い米国心臓病学会にはほとんど参加していないから、と思われました。

海外での学会に参加する利点の1つとして、日常診療からその期間のみ完全に切り離されているためその地域の観光や文化に思う存分浸れるとい

う点があります。前回2007年の第56回米国心臓病学会議の際には散見されたハリケーンカトリーナの爪あととは現在は全く目につかず、街はすっかり賑やかさを取り戻しているように見えました。ニューオリンズはご存知のようにジャズの街であり、繁華街であるバーボンストリートを中心にジャズの演奏を聞き、基礎研究を行っている旧友も含めて連日の食事で情報交換を行いました。

最後に、米国心臓病学会は以前ほどの勢いは無くなったといってもやはり循環器領域における世界最大の学会であり、どんなに小さな会場でも最新の知見の発表と鋭い意見の交換が行われています。循環器領域のこれだけの数の基礎研究者と臨床研究者が一同に会するのもこの学会のみであり、是非来年も演題発表者としてこの学会に参加したいものだと考えながらニューオリンズの学会場を後にしました。